



吉田 いくよ

「空いっぱい 空があるように
海いっぱい 海があるように
人よ 心いっぱい 美しい心をもって
この空を この海を この土を 愛そう」

四月にこの歌を吟ずることになっています。これは藤浦洸という昭和時代の作詞家、詩人の「こころ」という詩です。シンプルな言葉に壮大な心の深さを感じます。この詩に節を付けて歌うと、「自然」と「人の心」の一体感が希望や願いといった思いとして、しみじみと感じられるのです。藤浦洸という名前に聞き覚えがありました。私の最初の記憶は「私の秘密」NHKテレビ番組に出演している姿です。ずっとNHKの司会者だと思っていました。痩せてヒョロヒョロし、気難しそうなおじさん、というイメージ。ずっとそう思っていました。

ところが多彩な才能を持っており、数々の有名な歌手の歌を作っていたのです。「ラジオ体操の歌」「悲しき口笛」「別れのブルース」「水色のワルツ」「ひばりの花売り娘」「一杯のコーヒーから」「東京キッド」「バラ色の人生」……

今、CMでよく歌われているラジオ体操の歌「新しい朝が来た 希望の朝だ……」さわやかで清々しい気持ちにさせる、あの歌の作詞家でもあったのです。

スコットランド民謡「アニー・ローリー」私の中学時代の「帰りの曲」で毎日夕方四時になると校内放送されました。この日本語歌詞も藤浦洸、「懐かし川辺に 露はあれど いとしのアニー・ローリー いまやいずこ……」この曲を聴くたびに私の中学時代が返ってくる。淡谷のり子・美空ひばり、有名な歌手の作詞・ピアノを弾き、歌を歌い、多趣味で多才な作詞家であった彼は明治三十一年生まれというがその歌・歌詞は今も古びない。ひよんなことから藤浦洸の名前を見つけ、改めて知ることになった「心」。心を込めて朗々と吟じてみよう。詩吟がなぜ心にしみるかという漢詩の素晴らしさもさることながら、詩を構成する間の「節」が情緒を作るからだと思う。これは朗読にも通ずるところがあり、つまり「間」を活かすということだ。言葉と言葉の間を語る、と捉えて全身で表現する、そう思っています。声を出して歌えること、表現することは幸せなことと思っています。

今年の年間テーマは…… 駆ける

馬編の漢字（駆・駒・駐・験・驚・騷・馳・憑・駅・騎）をテーマにお届けします

今月は【駐】

鈴木 俊子

月日は百代の過客にして行きかう年もまた旅人なり。

俳聖と呼ばれる俳人・松尾芭蕉は、一六八九年三月下旬、江戸・深川の庵から旅立ち、紀行文の名作「奥の細道」が生まれました。その旅は、二四〇〇キロ、一五〇日間に及んだそうです。もちろん歩いての旅、車でも列車でも、今なら数日という距離でしょうか。

既に人間が馬に乗っての移動があった時代ですが、この旅は馬ではなく自らの足でした。

月にまで人間が行こうとする現代、芭蕉はこの時代を想像していたのでしょうか。

船、列車、車、飛行機。人類は文明の進化と共に様々な移動手段を手に入れました。便利さと速さを求めたこれらの乗り物は、人間の生活を劇的に変化させただけではなく、モノや文化が行き交い我々は多様な文化を享受しています。

翻って「駐」。馬に主・あるじと書いて「駐」。

馬や人がとどまる場所。永遠に走り続ける訳ではない乗り物は、必ず止まり留まる時が来て、目的地に着いたときや休憩の時に、主である人間の意思、あるいは機械の規則性によって止まります。

芭蕉は様々な場所で名句を詠みまし。身近にある景色が、約三五〇年経つても、時代の景色や心情が鮮やかに立ち上がるのは、自分の足で歩き、自分の意思でとどまり、全身で感じたからに違いないと思うのです。

奥の細道の旅では、旅の旅立ちと旅の終わりに、芭蕉は船で川を渡ったそうです。川を渡る風を感じながら何を思っていたのでしょうか。

タイプ・コスパなど、スピードと効率求められる今だからこそ、自らの足で歩くことの大切さや得られる何か、スピードが遅い事によって学ぶことが多いような気がします。目的に向かい走るだけではなく、途中で出会う何かこそが、人生に豊かさを与えてくれるのではないのでしょうか。春、新しいスニーカーでも買いましょうか。



澤村 亜輝

日常の喧騒の中で、私たちは常に「動」の状態にある。目的地へ急ぎ、効率を求め、視線は常に先にある何かを追っている。そんな流れの中で、ふと立ち止まることを強いてくるのが「駐」という漢字だ。駐車、駐輪、あるいは駐在。この一文字は、動いているものを一時的に停止させ、その場に留める力を持っている。先日、自転車道をスパーの駐輪場に「駐」めたときのことだ。いつもなら鍵をかけるすぐに脳が買い物モードになる。しかしその日は、ふと、自分の自転車に置かれた景色を眺めてみた。そこには整然と、あるいは少し窮屈そうに並ぶ数台の自転車があった。

よく見ると、当然ながら一つとして同じものはない。雨風にさらされて錆びたチェーン、子供を乗せるためのチャイルドシート、個性を主張する作りの自転車。それらは単なる移動手段ではなく、誰かの生活の欠片であり、今日という日を送ってきたのだと気づかされた。普段は「ありふれた風景」としか思っていなかった風景が、急に人間味溢れる風景に見えてきたのである。

「駐」という字を分解すると、馬に主と書く。かつて馬を止め、主人がそこに留まる様子を表しているのだらう。現代において馬は車や自転車に代わったが、根底にある本質は変わらない。前進を止めて、すぐに次のことに意識を振り向けるのではなく、ひと息ついて立ち止まって自分のいる場所に意識を向ける。私たちは止まることを「停滞」や「遅れ」と捉えがちだが、実は「駐」まる時間にこそ、新しい発見の種が落ちているのだと改めて思った。アスファルトの隙間から顔を出す花、季節によって変わる風の匂い、それを自分がどう感じているか。効率を追い求める日々の中で、物理的にもそして精神的にも、敢えて意識的に「駐」まる時間を持ち、見落としていた何かに気付ける時間を持つこと。慌ただしい毎日でも、この些細な心の持ちよう、潤いが生まれてくるのではないかと、思った春の日だった。



津川 美穂

「駐」と聞いてまず思い浮かんだのは「駐車」しかも「縦列駐車」でした。今から十年も前のことになりましたが、免許取得のため自動車学校に通っていた頃、縦列駐車がとても苦手だったので。当時は若さでなんとか合格したもの、今は同じことが出来るかどうかわかりません。いえ、きつと出来ないでしょう。車は毎日のように運転します。バックモニターの有難みが身に染みる日々です。娘が車を買う時も、車にあまり興味が無かった彼女にとつて車種やデザイン、車体の色などは重要では無く、希望はバックモニターが付いている事、それだけでした。スパーの駐車場、時々駐車に難儀されている方と遭遇する事がありますが、枠内にピッタリと収めるのは、なかなか大変なことですね。バックモニターを利用している私も、車から出てみると枠内ではあるものの、斜めになっている、なんてことも良くあります。自分ではサイドのラインに平行だと思つてエンジンを切るのに、アレはどうしてなんだろう。ある仕事先では、駐車場の隣が田んぼだったり小さな川だったりするので、バックで駐車する際に下がりが足りすぎて田んぼや川に落ちてしまわないかとヒヤヒヤしてしまいます。もちろんバックモニターを見るのですが、白線やブロックなどが有るわけではなく、境界がわかりにくいのが恐怖をおおります。また最近駐車の際に操作を誤ってお店の入口や壁に突っ込んでしまう事故がニュースでもよく取り上げられています。昔のアニメの台詞に「認めたくないものだな、自分自身の若さゆえの過ち」というのを」というのがありますね。有名なのでご存知の方もいらっしゃると思いますが、私は最近思うのです。「認めなければなるまいな、若くないゆえの過ち」というのを。車の操作ミスは私もこの先行く道だと思い、安全運転を一層心がけます。

【編集後記】

福島県内でも、桜の便りが聞かれるようになりました。春は、新たなスタートや出逢いの季節でもあります。心躍る桜のもと、みなさまが楽しくお過ごしになれることを願っております。